

幼児の人格の発達と保育上の問題点 (三)



帆 足 喜 与 子

・自律的、自主的パーソナリティをつくるために

先号は欲求不満の積み重なりが、効果的でない行動をさそうことをくわしく考えてみた。

一方欲求不満はまた目標の価値をあげかつ自分を励ましてくれることもある。筆者はかつてキャンディをとることをすこし待たせるか、長く待たせるか、また全然待たせないかの三つの条件下で、キャンディに対する欲求がどのようにちがってくるかをみたことがある。すると待たせられれば待たせられるほどキャンディへの欲求はたかまり、かつ、それぞれのキャンディへの欲求の持ち方に差がついていくことを見出した。

欲求を満たすための手段をいろいろくふうして、建設的に前進的に反応した者は、結局キャンディを多くとり、阻止に対して消

極的態度を示した者は、キャンディのとり方がすくなかった。

つまり欲求不満は大部分の人を意欲的にしかつ個性化させた。

だから欲求阻止は、人の行動の効果を低めるし、また効果的にさせるようにはたらくということになる。

ここで、エリクソンが各年齢段階のよいパーソナリティとしてあるべき規準を示しているうちの、幼児初期の自律性と、遊びの時期の自発性を問題としてみよう。

幼児初期の自律性が確立しなければならぬ時に反抗期がある。子どもは意識しているわけではないけれども、人間性に帰因する全目的手段として、自律的になりたいときだから反抗するのである。

実行的にはとてもおとなの巧みさにおよばないけれど、意志的には自己主張し、試したい気持ちがあるから、おとなが子どもの

成果をみて能力を過小評価して認めてくれないと、前進的意志は進路を失ってしまうことになる。

こういうとき、おとなの方は反抗期だからしようがない、手がつけられないといって子どもをほしのままにさせておいてもいけないし、またすつかり圧制してしまってもいけない。意志的に親から離れることをのぞんでいるのだから、りきみかえった気持ちに同感して、独立心をこちらも十分に満足するのだという気持ちのみせながら、子どもの行なった選択やできばえで許容できる範囲を可能な限りひろくして認めてやる。どうしても子ども自身にとって、あるいは家庭の他の人にとって、不都合になることは、絶対に認めないというけじめをつけたいとおもう。反抗期において、おとなとあらがうこともまた自我意識を育てるために必要であって、おとなのがわとしても、不快な気持ちを味わったりめんどうを感じながらもまともに相手になって、落ちつくべき解決を求める態度をもちたいとおもう。

こうした態度は決して反抗期に対してだけのものでなく、子どもに対するときの根本態度だとおもう。よく電車の中などでお母さんが三歳以上の子どもを抱きよせて愛撫するのを見かけるけれども、もうこの年齢になったら子どもなりの独立地位を与えてさっぱりした方がいいとおもう。家庭である時間そうすることはいいし必要でもあるけれども、外出先では子どもなりの興味に応じ

た独立心をもってまわりの世界をながめさせ、社会から特に子どもをかばうような態度をとらない方がいい。おとなの方が特に庇護の態度をとらなければ、子どもは子どもなりの精神的居場所を社会の中に発見するはずである。こういった独立的態度に立てば、子どもは自分の身にせまった問題に関しての葛藤解決を自分で果たすのである。

子どもはおとなの無意識の世界をよむ。彼らは独立したがっているが、結局は弱いので、親に従って保護を求めた方が近道だから、親の方でふと子どもを自分の手許になつかせたい気持ちに陥ると、反抗期を一応通り越した子どもは、親の気持ちをよみて、それについていこうとする。親の方で意識的に独立させたとおもっていたとしても、子どもの方はもうすこし裏をよみとっている。それではつきはなしてしまえばよいかというと、幼児期はそうともいえない。やはり養護的な態度は必要である。意識的にひとり立ちしたいのだから、その気持ちを励ますふんい気ので話しかうこと、そして助けてあげるようなそぶりは伝えずにしながら、事実上よい助力者になってやることだとおもう。

自律的になるとは、自分で動くことである。おとなが監督的ふんい気をもって、ひもをひっぱりながら臨んでいては自律は完成しない。自律の時期は身のまわりの始末の確立する時期であり、その次に自発的な時期がくる。

自発的な時期においても、あまり親切にしすぎないで、子どもという相手にふさわしい社会的な独立性のあるつきあいをすることにしたらよいとおもう。子どもはその方をよろこんでいることが表情をみるとわかる。

こうしてあくまでも一個の人間としての子どものと、おとなのあいだに一線を画して、あちらがわに、誰にもいじられ妨げられることのない自我が育っていくことをねがう。

・レディネスの問題

レディネスについても従来多くのことがいわれている。しかもなおいろいろな学習をはじめ適切な時期がいつであるかについて知られていないことがあまりにも多い。

ただ学習が主に成熟に依存して開始される事柄については、子どもの自発性を目安として、すすんで何かをしようとするときにはへたでもさせて、そして実行した満足感を味わわせながら、その動作を身につけさせていくことが、結局最も効果的だといわれる。そうなると、今まで考えてきた自律性、自発性に直接関連することがわかる。

特に日常の行動でなくても、成熟を期に学習を開始すれば最も有効で、将来にわたって効果的な成果が期待できるわけである。

たとえば水泳などは、生後一年以内にはじめうることをあえるフイ

ルムが教えていた。音楽その他いろいろな文化活動の学習開始時期を決定することは、その分野の専門家や心理学者の綿密な研究によらなければならないが、母親や教師でも、日常子どものそばにいて行動を観察していると、学習を開始していいかどうかはある程度推測できる。どういう規準で判断したらよいかというところ、

一、学習に興味をもっているか

二、興味が一定時間継続するか

三、練習によって進歩があるか

の三つである。人間には個人差があるから、たとえ一般的開始期の目安のついているものでも、おのおの子どもにとって適時であるかは、やはり右の規準によって判断することができる。

先日あるお母さまから、年子の兄妹のうち妹の方が字や数を積極的におぼえたがり、また実際さきに進んでしまうので、兄に劣等感を持たせないために妹を抑えているのだが……という話を聞いた。私はそうしなくてもいいとおもった。妹の自発性を抑える必要はないし、いいことではない。それよりも問題をすべて積極的に考慮し、兄は兄で自信のもてる何かがあるにちがいないから、それを見つけていくべきである。妹がよくできるといふうちへと変った事態に対して、まわりの人はおおらかに、特に問題としてとり上げないで、ただ事実を事実としてみるのがいいとおもう。

・すなおということ

最近あることからつくづく感ずることは、「なんでもすなおにはいいときく」という私たちが徳だとおもっていることは、わいりいではないが、そのこと自体を修養の目標にしないでいいのではないかとということである。

事実このごろの子どもたちをみると、相当に自己主張や自己弁護が上手で、そう簡単に「はい」といったり、自分のわるいということ認めることをしないような傾向が出てきた。人間の心は、ちょっとしたことに対して複雑に感じて反応したがるから、一律に「はい」とすなおな態度をみせようとすると、そこに抑圧がはたきすぎはしないかとおもわれてくる。抑圧が多いと行動の効果がすくなくなり、生産性が低くなる。行動の効率の上で競争にまけては、現代の国際社会に損をするだろうとおもうので、あえて提案する次第である。

そこで子どもを指示する親や教師のがわの態度としては、こちらのいったことが相手の心の中にどのように取り入れられつつあるかを細かく観察すること、先号で述べた「葛藤の解決」をできるだけ子ども自身の心の中で行なわせることである。葛藤の解決には時間がかかるし、また他人には知られない本人にとって妥当性をもつ都合もあるのだから、肯定や服従を示すことだけが学

習者のなすべきことだなどとおもわずに、こちらの投げかけた提案を契機として、相手がどのように変わり進歩していったかをみればそれでよいとおもう。そうすればこちらも同時に学習すること、発見することがたくさんわいてくる。

子どもがもし自分のいうことを全面的に否定してうけいれてくれなかったらあ、大体怒るか、それでなければ、笑って軽く流してしまうけれど、両方とも真実に深くたちいらぬ態度だとおもう。子どもの立場はどうなのかしらと相手の精神過程を追求することである。

子どもが、異常なほどに攻撃的であるばあ、攻撃の対症療法として、こちらも攻撃的にやりかえして攻撃されたいかにいやな気持ちかを知らせるとか、わざと相手にならないとかの方法がとられるが、もしかするとべつな時のべつの事柄における抑圧が大きいために、攻撃という形ではけ口が求められているのかもしれない。そうしたふうでない攻撃の原因が何かをつきとめようと心掛けることが大切である。

次に人格形成のもう一つの側面、すなわちパーソナリティの内容の学習、つまり特性や態度などの形成について考えよう。

四、パーソナリティの内容

・男女の行動型

マッセンらは、子どもがそれぞれ自分の属する性にふさわしい行動をするようになるのは、次の三つの条件によるとしている。すなわち、(一)自分の性にふさわしい行動をしたときにうける親や仲間からの賞讃、愛情、受容へのぞみ (二)ふさわしくない行動に対する罰や拒否への恐怖 (三)同性の親、親代り、すなわち自我理想への同一化である。

「男の子でしょう、泣かないのよ」とか「女の子だからやさしくしなさい」などと、性差をつけた話しかけをする人が多いのに対して、その必要はないという説があるが、私は強いて無差別にする必要はないとおもう。各々の属する性の本性を通してしか人間のでありえないとおもうからである。なぜなら幼児期から相当に性差はみられるのだから。

大方の三、四、五歳の子どもは、すでに自分の属する性にふさわしい活動や目標の方を好んで選ぶとされている。特に四歳ごろに、相当はつきりと自分の属する性に同一化した行動をとるようになる。

女の子がお人形をかわいがったり、鏡をのぞいたりすると、おとなはついほほえましくおもしろい、男の子が勇敢なことをすると、さすがはと感ずる気持ちは、逆に女の子がお転婆をしたときにえらいえらいなどと賞讃するよりはるかに自然であり、自然なだけ

に根強く真実味がある。そういつたおとなの心持ちが子ども自身に伝わったとき、当人はやはり承認されたという印象を強く持ち、安定感がわくとおもう。男女どちらが上位かということではないが、その社会でそれぞれの性に本来的でありふさわしいとおもわれている役割は、当然幼児期から準備されてよいとおもう。

・道徳

子どもが道徳性を身につけていくのに、良心(超自我)の養成が重要である。二歳の子どもがきれいなテーブルかけの上にミルクをこぼしたとき感ずることは、単に罰や恐れというような表面的なものであるが、四歳ともなると、何かもっと不愉快な罪の感じをいなくようになる。どうしてこのようになるかといえば、さきにも述べたように、子どものもつ同一化のはたらきによるからである。子どもはできる限り親と同じようにふるまい、親と同じように感ずることによって、安定感をつくりあげている。親のもつ道徳観をもつようになることを、超自我の発達といい、一たん子どもの中にこの規準ができ上がると、それに照らして自分の行為を判断し、それからはずれていれば自分で自分を罰する気持ちをいだく。しかし幼児期は何といっても道徳観はしっかりしたものでなく、自分自身責任をとるかのような、それでいておとなに自分の行為の判断をまかせてしまったような不確実さである。だから

いいことをしたりすると、子どものその誇らかな顔付の中に、自分のよい行為に自分で驚き、感心しているようなようすがみえまたおとなの同意を得るためによいことをした報告にすることが多い。一方、彼らが何かよくないことをしたとき、親は愛情を手控えると、物をやらないというような、物的なものを操作して罰を与えて教育をほどこす。幼稚園時代においては、愛情を手控えることの方が、子どもの中にきびしい良心をつくるのに適切である。ただ愛情を手控えて効果があるのは、日常豊かな愛情を与えられているばあいのことである。

その他、物語などによって、よい行ない、よい心情はどういうものであるかを知らせることによって道徳性が養成される。

しかし、何といってもいちばん重要なのは、同一化のはたらしによる道徳観の発達である。つまり親や教師の行ないや心情が自然に子どもにはいつていく過程である。おとなが口先だけで道徳らしいことをいっても、本心がちがえば、ちゃんとその本心の程度に準じて道徳化されている。しかも一定の問題に対してとった一定の態度というより、おとなの日頃の道徳的人格のレベルが、子どもと生活しているあいだに、知らぬうちにうつっているのである。

・学習と水路づけ

人格形成の内容や態度の面について、性の役割と道徳について考えてきた。しかしさらに、根本的に各自の素質的な傾向性が、環境とのほたらきあいによって、いろいろな性格特性となっていくことについてはまだ考えなかった。ただ素質的な、もしくは生物学的生理学的な裏づけをもつ特性とか性格は、実は相当程度教育の限界を超えた問題である。たとえば分裂質と循環質とか、内臓緊張型、身体緊張型、頭脳緊張型などの性格類型論が教えるものは、むしろ人格の中でも決定された面と一応考えて、それゆえ今回はふれないことにする。もっとも決定されたものなりに、教育の目標や方法と直接に関連をもつことではあるが。

このほかに人格の内容や態度は無数の学習の機会、水路づけの機会を通して人間の身につけてきている。水路づけというのはあまりきかれないことばかもしれないが、マールフィーが指摘した現象で、人間が生涯のあいだ、特に幼い時が主だとおもうが、一たん特定のものを好んだり使用したりした経験をすると、ちょうど地上に水路ができあがっていく時のように、一度ついたみちが次に再び使われ、さらに重ねて……というふうにして、どんどん深く掘られていくのに似て、一度選んだものが再び、みたびとられ、やがてそのものでなければ好ましくないと、いうようにその人の趣味嗜好に固定化していくことである。

どんなものを学習や水路づけの対象として子どもに与え、よい

人格をつくっていったらいいかということとは、興味深い問題にちがいないが、今のところ私の力ではおよばない。

またどうすればよく学習が行なわれるかということについても考えなければならぬであった。

ただ一言にいえる大切なことは、そしてこれが最も重要なこととおもうが、子どもの上に築き上げられる人格の上に指導者の人格の影響が大きいということである。子どもの教育についてわからないことばかりだとおもうとき、相手に期待してあせるより、とにかく自分ができるだけたくさん知識をもち、まじめに人生を考え、センスを磨いていけば、それが子どもにうつっていくにちがいないとおもう。幼時の初期経験が大切だとよくいわれるが、こうした経験は、意図的意識的に与えられるよりも、養育者の人がらの総体にかかわるものである。

(川村短期大学)

引用文献

一、帆足喜与子 フラストレーション過程と欲求の変化 心研

二六巻五号一九五五年

二、Mussen et al. Child development and personality

Harper & Row, New York, 1964

三、詫摩武俊編 性格の理論 誠信書房 一九六九年

保育学年報 1968年度

特集 〈保育者—現状と問題点〉

日本保育学会編 B5判 定価 3,000円 千90円

- その年の保育に関することがら網羅された貴重な文献です。
- 日本保育学会によって1962年より毎年編集され、保育にたずさわる多くの方々により好評を博してきました。
- 分りやすく内容が整理されており、すべての幼稚園、保育園、保育者の養成機関、研究所に具備して頂きたい書です。

- 第1部 毎年開催される日本保育学会において発表された研究の集録
- 第2部 その年度の国内のみならず海外におよぶ総合的文献目録
- 第3部 幼児文化財、保育関係団体、保育者養成機関、保育行政、保育学と保育に関するすべての動きを集録
- 第4部 毎年特集として貴重な資料を掲載

発行所 株式会社フレーベル館